

令和3年度第9回アーバンデザインセミナー実績報告書

1. 開催日時

令和4年3月11日（金）18時30分～20時00分

参加人数: UDCBK での視聴: 6名、オンライン: 12名=計18名

※オンライン会議システムとUDCBKのオープンスペースでの視聴を併用

2. テーマ

「世界の伝統的集落から都市と住まいの知恵をくみ取る」

- 講師の及川清昭氏がこれまでフィールドワークをされてきた300を超える伝統的住居・集落・都市の事例から、現代の私たちが学べる叡智について教えていただき、未来のアーバンデザインについて展望した。

3. 話題提供者

- 及川 清昭 氏
立命館大学 理工学部 特命教授 / UDCBK センター長



4. 話題の概要

(1) 及川氏による講演

ア. 自己紹介

- 2016年の設立当時にUDCBKのセンター長を拝命し、今年の3月末に退任することとなるのでセンター長としては最後のお話しの機会となる。
- 大学で40年ほど研究生生活を行ってきたが、これまでの主な活動は、建築都市空間の調査と解析と計画の三本柱に大別される。今日、お話しをするのは、主に一つ目に関わる世界の伝統的住居集落都市の調査研究についてである。
- 現在、立命館大学のキャンパス計画室の室長を務めているが、各自治体でもこれまで約60のまちづくりなどに関する委員会活動にも参加してきた。
- 1980年代には国内の伝統的まち並み約150か所の調査を行った。その後、90年代から海外の伝統的住居の調査を始めた。これまで14回ほどの調査旅行に出かけ、インドネシア、パプアニューギニア、メキシコ、ペルー、ボリビア、中国、イエメン、トルコ、チベット、カメルーン、シリア、ベトナム、ラオスといった場所で約330か所を訪れている。

イ. 調査研究の意図

- 建築界では、60年代後半から70年代後半にかけて、デザインサーベイという伝統的建築をフィールドワークしながら調査するという手法が盛んになった。
- その背景には、世界中で伝統的建築とは異なる同じような建築が増えてきたことに対する疑問があった。また、有名建築家が設計したものではない、地域にある無名な建築にも等しく文化的価値があるのではないかという見直しの機運もあった。音楽で言えば、モーツァルトもビートルズも日本の歌謡も同じように価値があるということに通じる。
- 伝統的な住居や集落・都市の空間構成は、現代あるいは将来の居住環境や住まいの在り方を考えてゆく上で、きわめて重要な示唆を与えてくれる。伝統的な集落や住居においては、環境条件の複雑かつ微妙な差異に適応した独創的な空間形成方法が随所に見られ、それらは現代の建築・都市計画にも充分に通用する叡智に富んでいる。
- 原広司氏の『集落の教え』や藤井明氏の『集落探訪』などには、プリミティブな住まいから学ぶべきことが書かれている。
- これまで、調査の成果を論文や書籍のほか、テレビ番組（『世界遺産』や『世界一受けたい授業』）でも紹介してきた。

ウ. 世界の伝統的集落から都市と住まいの十の知恵

知恵 1. 歴史的まち並みの美しさは、類似性の中の差異性にある

- 日本の歴史的まち並みへの関心は、60年代から加速し、まち並みの修景・保存がなされるようになり、今では、まちづくりの資源、特に観光資源となっている。
- 格子やむしこ窓、うだつ、煙りだし（越屋根）などは、地域や場所によって、少しずつ違いがあることが分かった。ひとつひとつの建物がバラバラではまち並みは美しくなく、しかしすべて同じ景観でも退屈になる。また歴史的まち並みの美しさは、統一性と多様性の絶妙なバランスの中にあることが再認識された。
- ギリシャのサントリーニ島の建物は、石灰の白い色で統一されている。またインドのジョドプールは青、同じインドのジャイプールはピンク色で統一されている。国内の成羽（岡山県）では石州瓦と弁柄色の外観で統一された美しいまち並みが見られる。

知恵2. さまざまな場所が居住地として選択されうる

- 山の頂上や斜面、断崖、砂漠、水上など人々の住まう場所は多様である。場所に適応するために、居住者自らが考え出し、改良していく住まい方がある。
- ペルーのチチカカ湖では、「トトラ」と呼ばれる葦の一種を刈り取り、乾燥させて、幾重にも重ねたものを湖に浮かばせ島をつくり、その上に家がある。調査当時は、58個の浮島に2,000人が住んでいると言われていた。昼間、島や住居が太陽熱を吸収してアンデスの夜の寒さをしのぐことができる。

知恵3. ひととは類似した自然環境においても異なる住まい方を選択する

- 伝統的な住居は、風土・歴史・習俗がその土地と一体となって発現する。しかし、自然環境は住まいの形に決定的な役割を果たすのではなく、単に可能性を提供する。決定権を持つのは土地でも気候でもなく、人間である。
- 和辻哲郎の『風土』という有名な著書では、住居を自然環境によって、モンスーン型・砂漠型・牧場型に分類しているが、実際は、そのように単純ではないように思われる。
- インドネシアの熱帯雨林気候の住まいは、大きな屋根が特徴的ではあるが、高床でなく、地床の家もあり、気候・風土が同じでも多様な住まい方が見られる。
- 大きな屋根の中はがらんだが、アロール島のピラミッド型の屋根の住居では、中を4つに区切って、寝室兼厨房、倉庫として効率的に活用している。

知恵4. 住まいは生命と財産を守る装置である

- 住まいの根本は、危険な外界や厳しい気候から命と財産を守るシェルターである。防御の機能が特化すると美しさが醸成される。
- イエメンの要塞集落は、外敵・他の社会集団から守るためでもあるが、同時に厳しい自然環境（日射や熱風、砂嵐、寒暖の差）からも守る。
- カメルーンの高地の住まいは、食べ物を保管する蔵、倉庫を守ることに特化している。

知恵 5. 住まいには設計理念がある、ときに、コスモロジーが住居をかたちづくる

- 住まいは象徴機能を持ち、民族や種族に共通のコスモロジー（世界観）が表徴される。空間のヒエラルキーやオリエンテーションが反映する（風水、占地術、家相など）。住居は文化現象であり、外界からのシェルターにとどまらず、物理的・実用主義的概念を超越する。
- インドネシアのトラジャ族の住まいは、トンコナンと呼ばれる家屋、母屋とアランと呼ばれる穀倉を持ち、トンコナンとアランが対応して列状に並ぶ。壁面には次の4色の彫刻がみられる。

白：北－主神／空、黄：東－神々／生、赤：西－夕日／死、黒：南－先祖／死後

知恵 6. 共同体を維持する装置と住まい方の仕組みがある

- 共同体固有のシンボルを持つ（集会所、コミュニティ施設など）。共同体を維持するための住まい方の仕組みが、形になって共有される。
- パプアニューギニアのハウスタンバラン（精霊の家）は川の精霊、森の精霊との交感の場でもある。今は、長老の話の聞いたり、男性が交流したりする場となっている（女性・子供は立ち入り禁止）。
- 中国（福建省）・客家の環状土楼は、同じ先祖をもつ同族の家族が住む集合住宅である。1階が厨房と食堂、2階は米の貯蔵庫、3、4階が寝室となっている。一つの楼の中での場所による有利、面積の差で不利が生じるのを極力避け、家族間に格差を生じさせないための工夫がある。これは大集団が一つの建物で共同生活する際の知恵である。

知恵 7. まちづくり・すまいづくりのヒントが隠されている

- コンパクトシティ、街路空間と住居の構成、屋上利用、連結建築、様々な技法がみられる。
- イエメンのシバームでは広大な砂漠に浮かび上がる摩天楼都市であり、コンパクトシティと言える。東西約500メートル、南北約400メートルという狭い場所に500棟もの高層住宅が林立し、5、6千人もの人が住んでいる。5から8階建ての建物は集合住宅ではなく一軒家である。1階と2階は、山羊や羊などの家畜小屋、倉庫として使われており、3階から上が居住空間である。建物が密集しているのは、砂漠特有の砂嵐と日照りから逃れたり、居住地を限定させ可能な限り周辺の耕作地を確保させたりするための知恵である。
- ダマスカスの旧市街はイスラーム都市であるが、中庭型住居で埋め尽くされており、プライバシーの確保がなされている。また、通り側の窓はほとんどなく、設ける場合は人間の目線よりも高くすることが、まちづくりの技法として守られている。広い道と街路樹という現代都市の考え方とは対照的に豊かな緑は限定された中庭にという

考え方である。また、日本では道路上には、建物は特別な場合以外はつくれないが、イスラーム都市にはサーバートと呼ばれる街路の上をまたぐように築かれた住居や建物がある。

- メキシコ・トラコタルパンのまち並みは家の前に列柱のあるポルチコがあり、一般の人も通行できる。このような仕組みは、日本にもあり、雁木と呼ばれる。地域住民相互による暗黙の契約に基づいて成り立っているまちづくりの知恵である。

知恵 8. 環境に配慮した建築手法が用意されている

- 自然環境条件に対する独創的な構想が見られる。風・光を調整装置（パッシブデザイン）としたり、地場材料を用いて自然に返したりする環境配慮型建築手法がある。
- 草や木、土が取れるところでは、それらを住居の材料として用いてきた。パプアニューギニアの草と木だけでできている住居は壁という概念があるのかどうかさえ疑わしい。
- チリの住まいは荒涼とした大地にあるが石灰岩だけは採取できるので、それを用いている。石より屋根を葺く草のほうが貴重で、遠くから集めてこななければならない。
- アドベという土を固めた材料、いわゆる日干しレンガは、アフリカから中近東、中南米にわたる世界の乾燥地帯のいたるところで用いられている。アドベは古くなれば溶けて大地に返っていく。
- イタリアのアルベロベッロは近辺で採れる石灰岩の薄板を円錐形に積み重ねた石積みの建築である。
- ボリビア・チバヤ族の芝生ハウスは、「チャンパ」と呼ばれる芝が根を張っている芝土を周囲から切り取り、そのまま地面から円錐形に積み上げていく。芝土はいずれ大地に戻るので、エコハウスである。
- イランなどにはバードギールと呼ばれる採風塔がある。これは換気塔であり、自然（風）の力を使った地球に負担をかけないパッシブデザインである。現在、建築界で騒がれているパッシブデザインには、このような伝統的な住まいの知恵と重なることが多いように思われる。

知恵 9. 世界は中庭住居で満ちている

- これは私だけの見解かもしれないが、世界には中庭型住居がとて多く見られる。日本の中庭・坪（壺）庭、中国の院子（ユアンツ）、スペインのパティオ、ドイツのアトリウムなど中庭型住居は敷地の外周部に沿って家屋を造り、中央の残った部分を庭にする。
- 中庭型住居が継承・展開された要因と特徴として、(1) 少雨乾燥・酷暑という気候条件に適していたこと (2) 防衛の機能に適していたこと (3) プライバシーの確保に適していたこと (4) 中庭が機能的なフレキシビリティを有すること (5) 稠密に配置す

ることが可能で高密度居住に適していたことが挙げられる。

- ロの字型の中庭型住居は、平屋か2階建てが一般的だが、3、4階になる中庭もある。また、共同のオープンスペース（中庭）を囲んで住居を配置という形式もある。
- 中国・黄土高原（黄河の中流域，陝西，山西，寧夏，甘肅の4省）に分布する伝統的穴居（洞穴の住まい）は地下に埋め込んだ中庭型住居である。現在も数千万人が住んでいる。

知恵 10. 受け継がれた住居のデザインには力がある

- 住居デザインボキャブラリーの宝庫であり、参照できるデザインが数多く存在する。
- アフリカ・マリのテレム族の住居は、増改築を施して墓地や聖域として再利用している。なお古い集落には先住民のテレム族の断崖の中の住居が残存し、住居として活用されているものがある。

以上のように、これまで人間は自然や社会、文化などが異なる多様な環境のもとで住生活を営んできたが、実際に世界各地の伝統的住居を踏査してみると、環境条件への対応の仕方も様々で、私たちの想像を絶するほどの構想力と表現力に満ち溢れている。このような伝統的住居は、残念ながら、近年の急激なグローバル化に伴って次第に失われつつあるが、そこには気候や地形などの環境条件を巧みに活用した独創的な住まい方が数多く見いだされ、自然環境との共生やエコロジカル・デザイン、サステナブル・デザインなどの面から、現代の居住計画にも十分に通用する英知に富んでいる。

伝統的な住まいのかたちは「環境配慮型デザインの宝庫」といえるもので、昨今、地球環境問題に対する関心が高まりつつある中で、再び注目を浴びつつある。

世界の伝統的な居住文化を見つめなおすと、自分たちの現在の住まいと都市を再考する手掛かりを探ることができる。

5. 感想および質疑応答

(1) 参加者: 海外の伝統的住居の保存はどのようになされているのか。日本でも参考にできる考え方などがあれば教えてほしい。

及川氏: 伝統的住居の中には、世界遺産に登録されているものもある。そういった場所は観光収入など、保存にお金が回るが、それ以外のところは、保存はあまり行われていない。伝統的な住居に住んでいる住民も少しお金があれば、コンクリートブロックやトタン屋根を使って近代的な家を造っている。そういったものに憧れを持っている。伝統的な住宅の隣に近代住宅があるということもある。私も何が何でも保存をしなければならないとは思っていない。むしろデータとして残しておくことが大切だと思い、調査研究をしてきた。

及川氏: また、調査においては、野宿ということはあまりなく、どこかの家に泊めてもらっていた。食べ物は、日本から缶詰を持っていった。また現地でも野菜や鶏肉はあり、何とか食べていくことはできる。

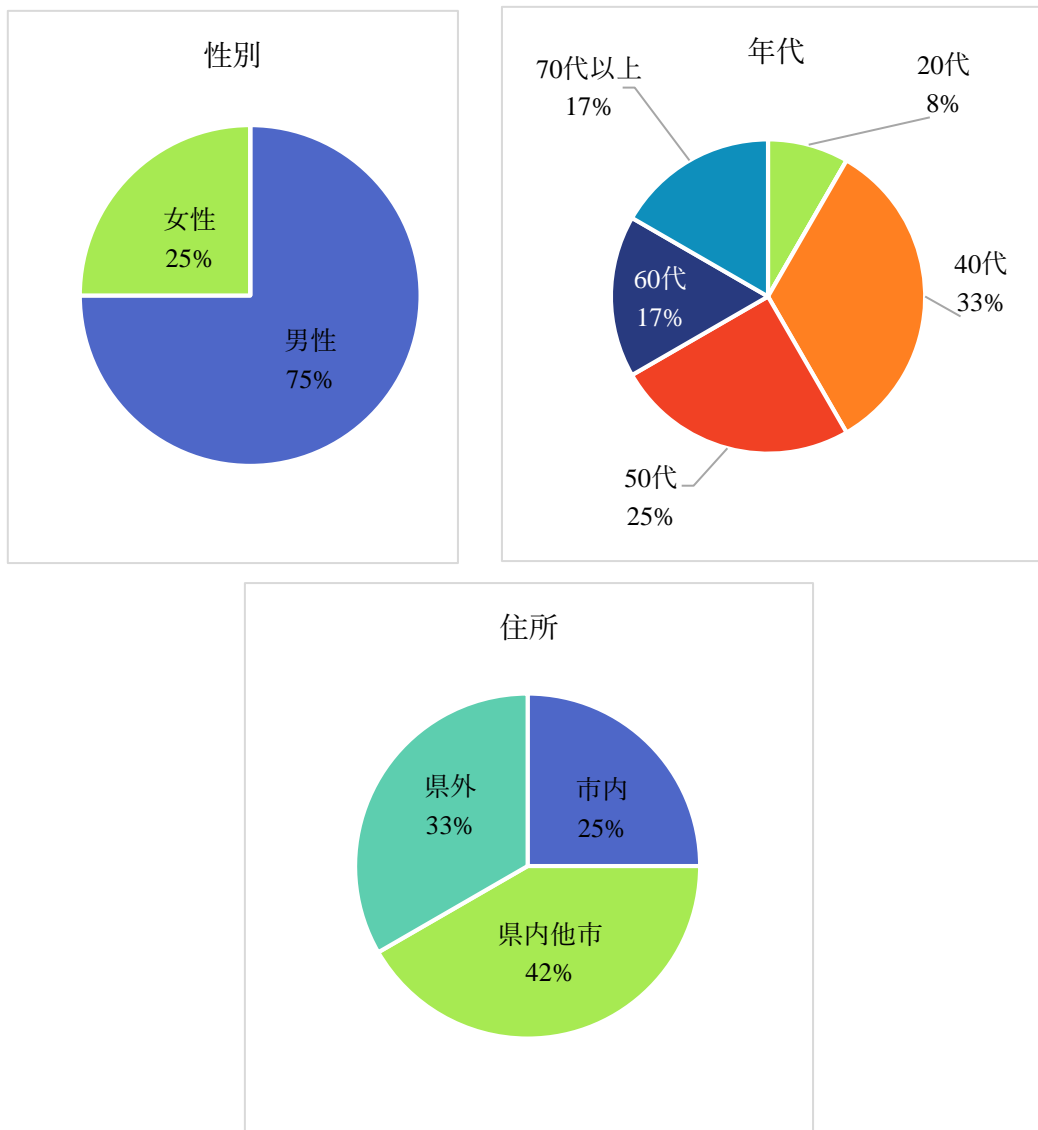
6. まとめ

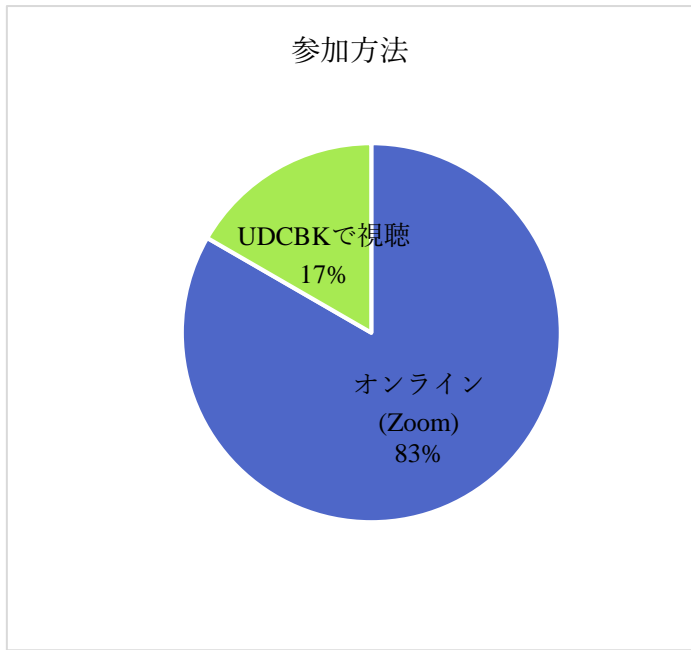
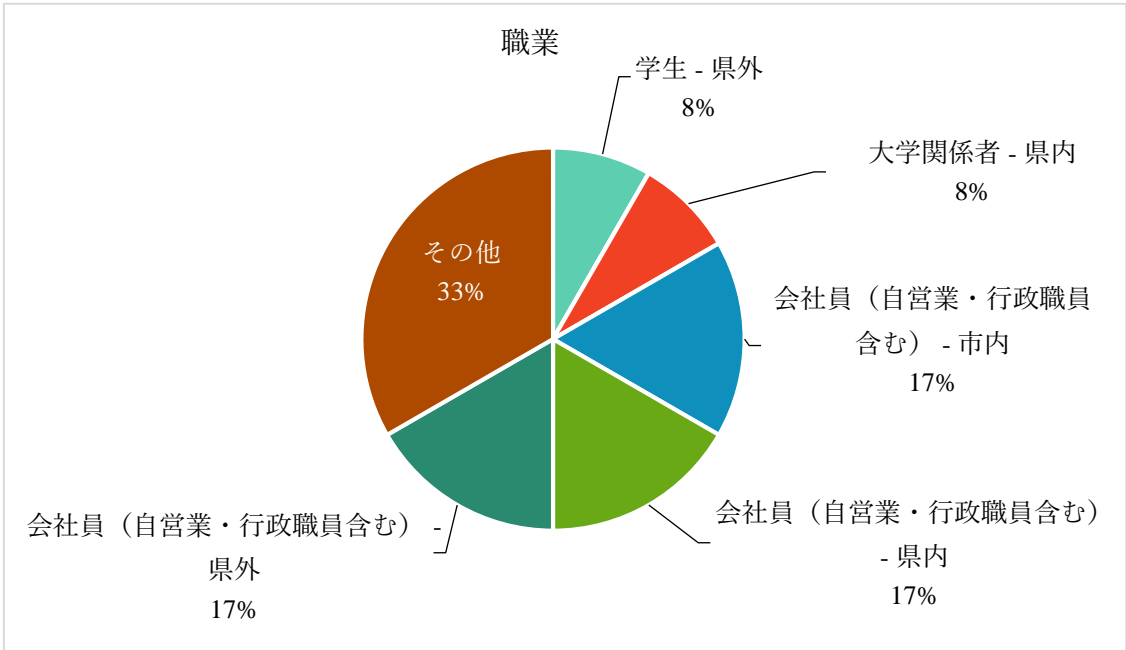
- 紹介いただいた住まいの中には、今日的な課題（環境への配慮やコミュニティづくり、コンパクトシティなど）に対して解決のヒントとなるような知恵が宿っており、その先進性には学ぶべきところが非常に多くあった。
- UDCBK としても、より一層、多様な視点やこれまでとは異なった見方を取り入れてアーバンデザインを捉えていきたいと考える。
- なお、UDCBK の設立から長きにわたってセンター長を務めていただいた及川先生は、令和 4 年 3 月末でセンター長を退任される。最後に、及川先生より、「これからますます UDCBK は盛り上がっていくはずですので、引き続き、皆さんから UDCBK への御支援をお願いいたします」との言葉をいただいた。これからも及川先生には御協力いただきながら皆さんと一緒に UDCBK の歩みを進めていきたい。

7. アンケートまとめ

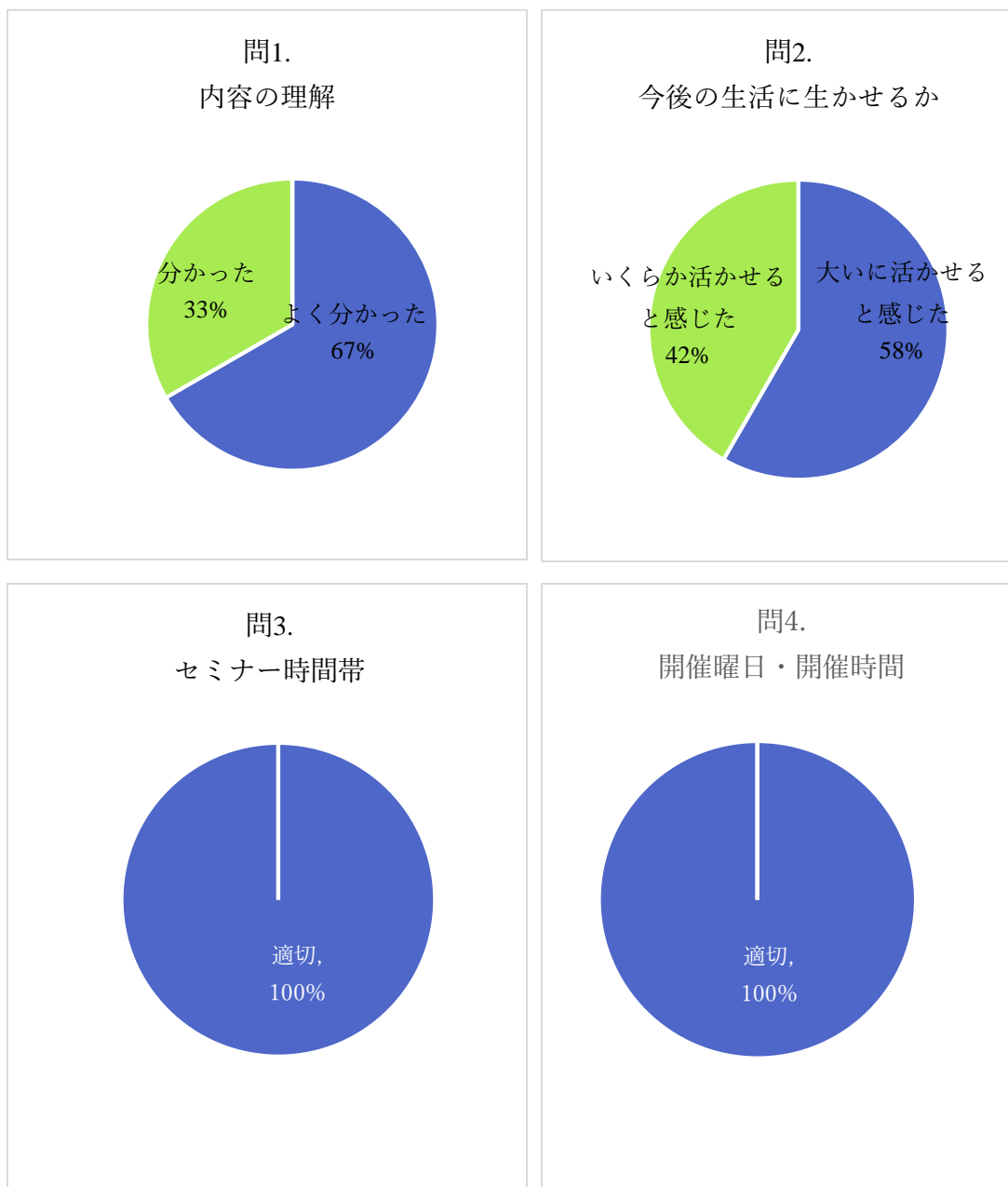
(1) 参加者属性

参加者 18 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 11 名、回答率は 61% だった。





(2) 内容について



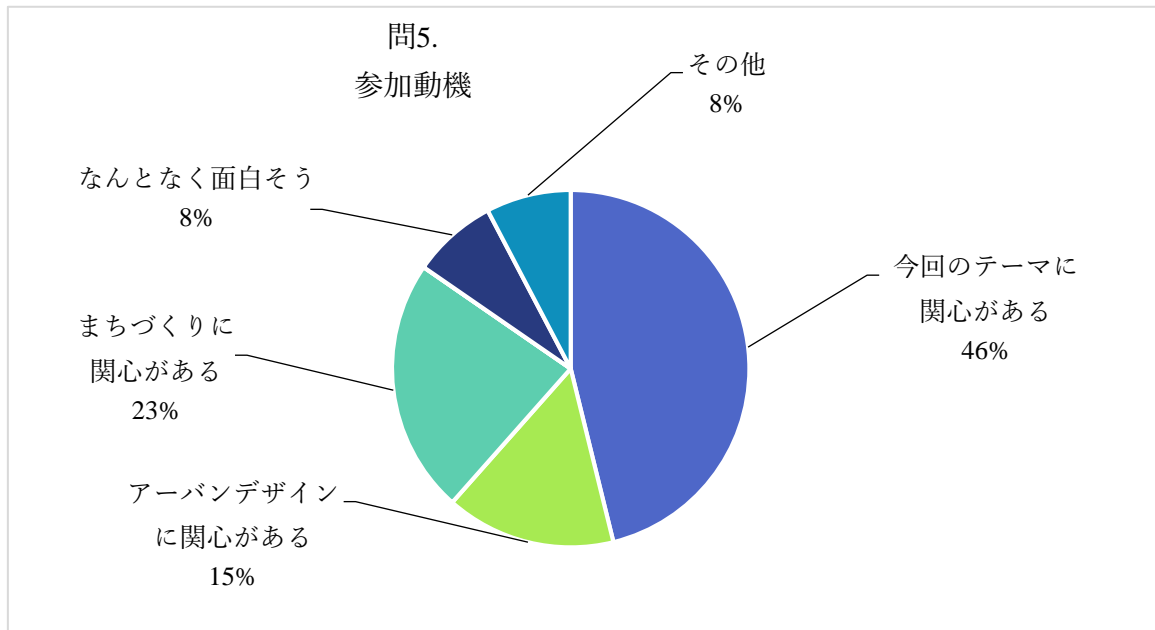
[自由記入欄回答]

問3. 時間はどうでしたか。

回答なし

問4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

回答なし



【自由記入欄回答】

問6. それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- 世界中の面白い住宅を知ることができ、大変おもしろかったです。(70代以上男性)
- 公園等の利用方法について(アイデアなど)(50代男性)

【自由記入欄回答】

問7. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- 最近、まち並みがどこにいても同じような家、店が並び魅力がないと思っていたのですが、街並みの美しさは類似性の中に差異性があるというお話をお聞きしてよくわかりました。滋賀には昔ながらのまち並みが残っていて、しかも今も普通に暮らされている魅力がある県だと思います。現代的な家に住みたい若い人たちもいる中保存するには行政の助成が大切だと思いました。先生が研究されてこられた世界中の家のように滋賀の昔ながらの家が古いだけでなくカッコよくておもしろいと発信できればもっと魅力的な県になると思います。世界中をまわられた先生のお話は知らないことばかりで本当に楽しかったです。ありがとうございました。(50代女性)
- 今回の、世界の伝統的な集落のお話は珍しく、どれも、とても印象に残りました。イタリアのアルペロベッコ、チチカカ湖の湖上住宅は特に印象に残りました。理由は、全て実際に訪問された及川先生の体験をふまえた御説明と動画で、内部に至るまで細かな建物の構造を知ることができたからだだと思います。また、アルペロベッコは以前

に NHK の番組で見て惹かれていた建物であり、湖上住宅は、子供のころ見ていた懐かしい「ひょっこりひょうたん島」の例えで、感覚的にも良く分かったからかと思えます。最近日本でも、古民家ブームなど伝統的な建物の価値が見直されていますが、まちづくりにも生かせるヒントがあるのだと気付かされました。(60代女性)

- 長期間にわたり御尽力賜りまして本当にありがとうございました。今後とも引き続き南草津のまちづくりに知見やお知恵を頂ければ幸いです。(50代男性)
- 及川センター長、5年間大変ご苦勞様でした。(70代以上男性)
- 世界の伝統的集落の特徴が 今日においても参考になると理解しました。(60代男性)
- 世界の住居を写真で紹介され大変分かりやすかった。類似した自然環境であっても形状の異なる住まいや周辺にある材用を用いた住居など日本の家と違う材料の住宅が世界にはあることがよく分かった。(50代男性)